

# 外科 マンスリーレター 2018.3



## 「ロボット手術」が4月から消化器がんにも保険適応になります！

2018年4月から消化器外科領域の多くのがんに対して、手術支援ロボット「ダヴィンチ」が保険診療として使用できるようになりました。「多関節機能」「3次元ハイビジョン映像」「手振れ補正機能」などを備えた手術支援ロボットは、内視鏡外科技術のブレイクスルーをもたらすと予想されています。



わたしたちは、消化器外科領域への適応拡大を見込んで、すでに3年前から胃がんに対する「ロボット支援胃がん手術」を導入し、先進医療の実施施設として経験を積んできました。すでに**40名以上**の患者さんの手術を安全に施行し、**胃がん「ロボット手術」の本邦における数少ない教育施設のひとつ**となっています(表1)。ロボット手術の特長はたくさんありますが、一番の特長は通常の手術器具は直線的であるのに対して、人間の手のように手術器具が関節を有していることです。1990年代に登場した腹腔鏡手術はおなかを大きく切開しないで、痛みが少なく回復の早い手術として普及してきました。しかし一方で、がんに対する複雑な手術を安全に行うには高度な技術が必要という問題点もありました。40cmほどもある長い直線的な手術器具を使用することが技術性困難性の理由のひとつでしたが、**ロボット手術では手術器具が関節を持ったことにより、まるで術者の手がおなかの中に入っているかのように容易に操作を行うことができます。さらに、手術部位が3次元カメラで拡大視され、手振れが補正されることにより、従来手術よりもはるかに精密な手術を容易に行えます。**



多関節機能

外科手術の技術は日々進歩してきましたが、ロボット手術はここ数十年の進歩の中でも特筆すべきもので、現在外科の手術技術は大きな転換点にあります。多くの企業がこの分野に参入しており、数年以内にはさらに多くのロボット技術が導入される見込みです。新しい技術を安全に使用するためには、正しい知識と技術を身に付けることが必要で、教育・トレーニングシステムも構築していく必要がありますが、手術支援ロボットにはシミュレーターが付属しており、手術場面を想定したトレーニングが可能という教育面での大きな利点もあります。当院では、患者さんにロボット支援手術の恩恵を享受していただけるよう、さらに技術の研鑽に努めて参ります。また、ロボット手術が全国に安全に普及するように、他施設の外科医の教育・トレーニングにも積極的に取り組んでいきたいと考えています。

近年、消化器がんに対する免疫の役割や、侵襲の大きな手術の負の側面も注目されるようになり、より低侵襲な手術が求められるようになってきました。**当院ではより侵襲の小さなロボット手術の適応を胃がんから食道がんや直腸がんにも拡大していきます。**個別のがん患者さんの病状に対してロボット手術が適しているかなどの相談も随時受け付けていますので、お気軽にご紹介を賜われれば幸いです。

3次元ハイビジョン画像

どうぞ、皆様のご支援とご協力を今後ともよろしくお願い申し上げます。

### ◆市立大津市民病院の胃がんロボット支援手術の実施状況 45名

#### 市立大津市民病院の胃がんロボット支援手術の教育・支援状況

教育・支援内容	実績
他施設からの見学	21施設、50名
他施設での導入	14施設、23回

いずれも2018年2月末現在

